雲田川梅柳新書

一

へ13
1300
2

へ13 1300 2

墨田川梅柳新書卷之二〇

本清　東都　曲亭主人著

三　光政避雨しつゝ赤繩ふ繫ぐ斑女前赤賢良をうるか。

吉田少將惟房の館ふい持つゝ松雅梅雅生ゝの心。

春雨老女義ふ仗くこれふ傳ゑ。粟津山田以下宗徒の家譜。若ふ仕く私ゑ。

當家の繁昌このうへのもとゝて。上下安堵のおもひをすゝねゑうふ。叡山月林寺の仲圓阿闍梨ハ。惟房の親族ゆゝくもいとしうべ。鄙ふ消息しくその安否を問せうふふかゝ日山田二郎光政ゆゝうて。彼寺ふ參りゝ。この序ゝとして光政辛崎明神ふ詣て立うへうふ。赤塚といふ所ゝ雲の上ゝ。山際いと闇ゝうつ。時雨のさゝと降ゝらて心の好景忽地ふ沒し風又いとく吹めゝく。琵琶の浪音名ふも似ざれと雨衣さえりとせざれい辛しゝて

道の次なる。酒店の簷下に避雨し。霽るを待とうる。この酒店のあるじ名を軍介と呼びく。こころざま勇く膂力人に勝れ。拳法相撲と嘗し。義に仗て財を惜まず。頗志氣ある壮夫く。妻と浮草と呼く。近曾娶りぬ又妹に鳴崎とゝふ處女ありて。よろづあるうるはしく。姿は舊都の花に劣らず。唐い比良の雪よりも清く。年まだ二八とう四日にぞなれば。心を焦しあのれまづ妻めとるとゝふものは。この日軍介は矢疋の恥辱に湖水のうらに投ぜく。彼ひとりもめるねば。鳴崎は嫂浮草とゝもに店をもりてあるに。山田三郎と年紀廿ばかりとおぼしき男。太刀の飾衣服のいろあでやかにて女子の色をべき裝ひあるにぞ。芙蓉の眸に。度う秋の波よりつゝ。憎くゝ皆待て。小しおくまりうる坐敷に清じ。裃の裾ぬりうる。蹴揚の泥もふきて。楪おく進ぜたり。紐さへむすぶ縁にとりて。男は

従者に。ものせとゝ。女は嫂に賞ぶ。送ふ客の剣守とたのゝうちに。枕ぶ
ぶるふ。こゝに雲散て雨歇に。れば光政も今はいとく立出つ。浮草はもとの庇の
行とゝろ。びゝ中え洽のうへゆりのけ。鳴崎は今さらふのふふるふ別とゝろうる。
あは降はとゝとおりの雨のゆゝ晴うれと。胸のくゝ曇り。やくて後山田三郎
は主の使してとゝ。敵山に登る毎に。軍介が店に甜心外ぐゝ鳴崎と見に見
もしつ。こゝとびに一とびへと。浦まるゆゝ世もゆりて。潮に住家ともゝ世名とも苦て。
公くまゝ相語ゝ。兄の軍介はゝゝゆゝ。日妻の浮草に妹ゝ
ゆとゝ出く。彼も今は年ふありはて。ゝゝ家え来貪ゝ。ゝ増ゝえゝむに
をは。されどそ丈伸ゝ若草の色とも超人も結ぐ生涯とめやまゝゆ花に
めに。ゝく。ゝゝ給来さく。都のまぶうも見做せゝんに。ゝ家に
ゆふに勝ゝ。ゆゝ行ゝゝひゝゝこゝ浮草ゝ理ゝゝ應て。ゝ鳴

山田三郎
光政辛崎
のかへれさ
軍介ら居ふ
笠やらして
鳴崎と契
ちめろり

情由をかたるに、嶋崎彼人のつゝきくまりのうらへいと悲しいめれど、他家に
縁ゝ結びぬ。夫定めせるまんよりいなは身の幸とおりひとへ。左も右りとうけ
引て。潜に山田三郎が来るとまちてぞうへと告ちせぞやとわりへ。なほその
人。この廿日ばかりに影ぶんせど。軍分いとの日より。支度人に語らひて妹を給事
をべき由とのこゝ。まゆふかへ人の儀とおく。吉田少将惟房の館へまうつるに
縛定しぶ。嶋崎歎びちのゝ限ゝおく。寔に光政どのこい過世よりの縁ゝ
ふやのりん。洛のいせんでまれ出方もいとをるに。彼人の主君おとしまず。吉田の
家へまうり仕ることとれしれど。ちいつ人にちとべもめれど。行とるくいそがれ
ず。遂に北白川の館へまいしぶ。聽く斑女前のかとうちうかつうれども。
衣食足る家に礼節なくて。男女席とおるゝ。ちゝめるざれば。じゆとし
いとゝぶのゝ。光政と面ゝとるゝ。ゝうへと告遣るべき便もなく。ゝ

山島の峯上と隔てゝ夜の明さに異ならど。徒に西三箇月とうとと問ふ。ゝ
心持ゝしうあばるい。ちゝの雲の晴ぬゝ月の障も常なるど。只管酸のの紙
嗜ひと出くとうゝ行に腹のゝうふくとうゝ赤塚にて彼人と假
初の密事に情の種さへ宿せーうと思へいれるゝ浅まくゝ逢まくゝ
れど。絶てよすがもあらりるされぬも山田三郎いらんすとゝ思ひければ
ゝ日辛崎の人さに軍分に居に憩ひ。後者に昼食べさせるどるに嶋崎が
見えざれば。ゝと本意なく立ちりてこの後月林寺に到るどふふゝびこゝびその
家に立ちりぬ。彼に人にゝめどさてゝひしゝゆも偽りふく。彼ゝ地へ嫁と
なん。嶋の海照る月ゝるぐうつふ安き人ぐろるると恨ぐうちつけ。その
行方と問ゝ定ぶ。やゝちひさゝく。遂に彼処へ憩いどありねその頃ゝ
斑女前に松稚梅稚二人の幼と将て。吉田の神社へ詣ふことあり。家隷に

松井源五純則。山田三郎光政。その日の倶なりけり。春雨老女はさらなり。鳰崎も五七人の侍婢それぞれに冊かしづかせ。被目深にて花麗に粧ひつゝ白川の館を立出るに。外めづらしき女どちは。鳥も聲を出し茂林に入り。魚は網を漏て荷下に隠ぶに異ならず。彼方此方見かへるにぞ。鳰崎は山田三郎と目と目を注かせ。送にこはいかにと胸うち騒げども。人目ありせばべつゆだならぬ言葉も得かはさで。たゞ空しく帰るを別れなり。かの道程に山田三郎は鳰崎がお従し館に給事せるさしるしをたどりゆくありて不審しく。その夕べひそかに母子。近習當家に召出されて君恩又莫大なれども。いまださせる奉公をもなさざるに。鳰崎がもかう禁じて情を運び。その發覚されんには忽地不忠の人となりなんことを。結びし果ぬ縁かなれども。懲におもひたえもしないで。彼のみて根て殃をや惹ぞとなるべき人偽りなるこのほどを笑えまかしと思ひて。只ひとすら心を苦しめるなり。

又松井源五純則はその心ざま粟津山田には遙に劣りて。人の才を猜み己が權を誇て。賄を見ては志を移し。色を好みて義に違ふこと多かれども。口に忠言を吐き君を欺きて。その權威却て彼二人が上にあり。件の源五斑女前吉田詣の折しも。縣乃侍婢を見るに。その顔色鳰崎におよぶものなく。寔に花中の花なるに。彼亦山田三郎におもひを運しにや。此方を見かへらざるを。源五はそれにこころありとして惑ひおもへる。その程を吹出べき媒もなくて。ものゝみそかにその人をおもふむに。群柏といふ童僮従のありしが。恰悧に許されて後堂へも常にまゐるなれば。彼をこれとそのいひざまに賺しつゝ。金子をとらせ。その艶簡をかの人に贈るべく。恋ふまさし欲しとなれば進らすべし。ありとも人なるさしせぬは縊ひ裸せと袂よりとり出し。群柏受とりて。頃を得ると應もなへど走りゆくなぞ。源五は世なもうれしげなる。既に恋のかなへる心持せられ。さて群柏は彼艶簡

斑女前
めつ日ゝ松葉
梅種と
特く
吉田の神社へ
詣りあくのうち
山田之郎八
鳥崎の給事して
われをとし
めくちろく
驚き怪しむ

と懐に挟て居るに到りて。忽地にそれと悟り。鳴崎は雨夜の品定にも山田三郎どのゝ事のみいひてけるも必定。源五どのはそれとはしらで聞えざる故今明白に艶簡のぬしを告んと投入させたるものなるべし。さらばこれは山田どのより偽りての回答をもなさんとて深念しつ。童女に似げなくて。心にはいとおもしろく思ひながら群柏は鳴崎が傍に入来りて親しく歩みより。それ山田三郎どのより進らせ給ふと潜かに。源五が艶簡をさし出せば。鳴崎はとる手も遅しとうち披きて讀に。思ひの外なる筆のあやに。いと不審みれば。まさしく巻おさめて群柏に對ひ。これはわが偽りにて。山田ぬしより贈らるゝものにはあるべからず。誰にかそのまれのかけりし明白にその人を聞えあらば。忽地に許めげて。うけめみせ給ひなん。なほされぬまでも匿のみとて。氣色あらく問詰るに群柏大に迷惑し。實はかゝる筋ありて。源五がそのを聞えしより。まづ応ぞらるを

に語ば。鳴崎聞てなほしばし尋思し。今面あたりこの艶簡を披露せば。その罪ゆゑが二人に係りなん痛しさに。これを火に投て灰となしなば。この志をとられしとも思ひなるべし。さりながらこの儘に進らせおかんとするにもあらず。いへば群柏一議にも及ばず。よく聞えたりされそのまゝとりはしめんと答へたりけれど山田ぬしへ進らせたるものなりし。又源五どのと申すが返辞の事を問ひもあらば便宜よくてありけじと答へてさて後さらへよき計を作べくんよくこゝろへの人と諭しつゝ。豫て便あるべきとて写しおける一封に。又一筆書をそへてこれを群柏に遁與したれば。うち點頭て外面へ出ねど。その夕山田三郎光政は痛瘻なく寝よもの儀をもちかけるに。ひとり燈に對て物の本讀居けるに。思ひもかけど群柏が来り。鳴崎が消息をゑくれし。且ぞ一くし。封皮切てよくこれどみれば過にし頃よりこの館にまかり候ぞ。告るに由なく

徒に月日をおくりぬる。班女前が吉田の神社に詣りしに、親く見えぬる。一言も交えぬ。本意なく別れまゐらせぬるぞ書つづけさせ給ふ。赤縁の文既に内外の亂を懷胎せりつる式。ちぐらくまゐりしに。今いや月もうきかりつる。いかゝとも思べき。このごろの心苦しさ。ぢこそと察しのべ。そもかくても露の命の緒。絶なんとは思ひ定めなど。つゝ哀まに書そめ。又別に。くれ〳〵に見給ふべくべりれば。今宵後園の樹の枝に。紙と結びさげ〳〵おきたり。それと葬ぬて。如此〳〵の如く。潸〳〵涙のこぼるゝ。申夜の間に。書を参る。光政い首尾打〳〵つ讀くちく大に驚く。彼既に有べく。月も重ねぬ。縱故郷にてのゆをめれ。密に〳〵ふるものいれるべぞの罪つゝでう暁るべき。こゝ〳〵に調戯〳〵。この禍と釀せしこそ越度なれ。さるべい彼もとりと苦しめんも。丈夫のこゝろかめ〳〵ぞ。こまれかくまゐ彼処に潜て。逢

べやとはりひあげぬ。その夜は障ることのなく。終に果さぬ。嶋崎は光政が合圖に違ふ。ふく恨む。次の日あるべ艶筒書をくめ。彼群柏と相語く贈れば。山田も懈るこゝろかゝ。かゝるゆゑ。黙止せし。今宵はうるべ逢べと回書めして。又群柏に遍与せし。松井源五爾窺〳〵ふく怪む。竊に彼童と物陰に招きよせく。緣由を詰問ふ。こゝわこそいはざりれ。つく〳〵威されく終に脱ふ言葉ぬ。ぬめ如此〳〵あり。終に箇様〳〵ことおちりのく言ちせ。彼回書とさく〳〵ちり出く〳〵せふれば。源五はうち聞きく讀もをちぬど。忽地怒氣色面にあゝれ。數回大息吹く〳〵ちりくはは。汝黙ふ〳〵ぬれ詐して。却て彼に謀〳〵且てちり。たれば汝はこゝ彭腸の仇あり。所詮刺ちべく死もるの外あ〳〵とぬまさく。力の鞆と握りしてば群柏驚き怡顔色土のごくに成りて。只茫〳〵のく〳〵泣ふちり。源五はこの形容と見〳〵かゝと打笑ひ

再び声を低しつゝ。やゝ群柏ふくゝゐ恒まそ。そのこゝろ戦きこゝ。なほ童ゐれ人が怖しくゝ。いつゝせん。ちゝはゝれど。今又この〳〵ゆゑゆゑと。懲ごゝふゐ〳〵果てゝ。このこゝろゆゑ恐〳〵がゝし。承引こゝ。ゐるゝけ〳〵ども。心と定めく回答ゐゝ。こゝ。感しつゝ嬶〳〵こゝろゐまべ。群柏い命こゝれんが恋〳〵こゝふ。おゐるく話ゐひ〳〵べ。源五額とさ〳〵せ〳〵。ゐご〳〵私語つ。鏡〳〵光政が回書と忙〳〵く巻こゝめく返〳〵与へゆゑ〳〵内外ふ立列まね。彼源五行ゐとゐ〳〵かれゐん。ゐるゐの更ふゐゐゐれ。

四

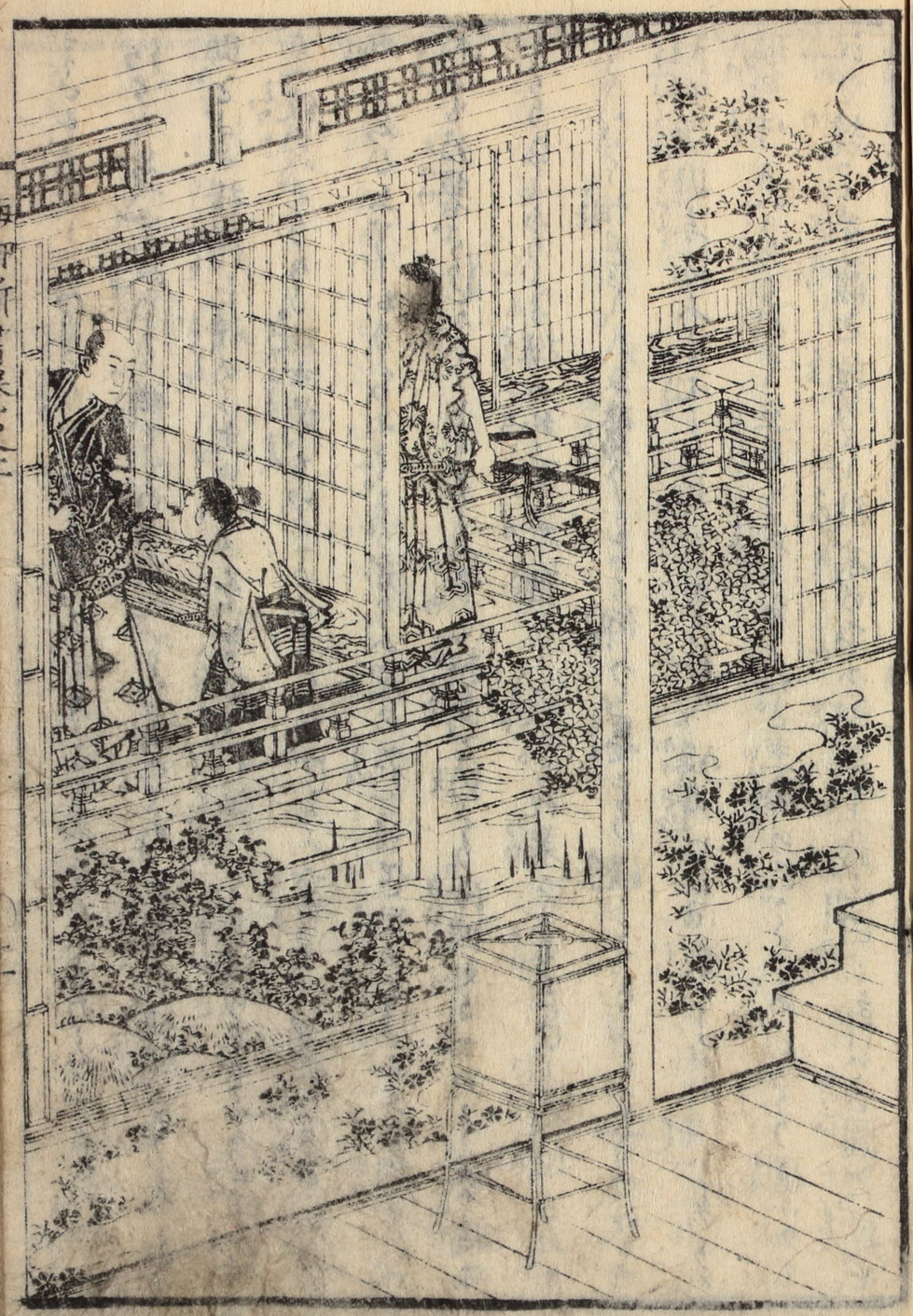
斑女花ふ寄せ〳〵黄金を賜ふ

この時弥生の中旬ふく。園の花色香妙ふ咲こぶん。盛も今二三日ふ過ぐと見ゆゐゐゐ少将惟房へ。毎日ふ院の御所四辻殿へまゐゐく。家ふ在をゐゐゐを稀ゐれバ斑女前もおのづゐ〳〵籠ゐちゐのんど。翌又んとおりゝ公のゐざゐゐ〳〵。夜の

わしの吹ぬゐのへゐも祈ゐゐものを。言下ふ青糸とかゐゐんも。いく惜しとおゐ〳〵て ひゐゐ端ちゐゐゐちふ出ゐふ折しも。さゐ〳〵と吹入ゐ風ふ引されく裳のゐゐゐふ ふゐゐゐゐ。ゐゐ揚く見ゐゐはゐふ。ゐゐゐゐと巻こめざる艶簡ふて。山田三郎が 鳥崎への回書ゐゐ。ゐちもおゐれど潜ゆふ讀果ゐ〳〵。これとゐ袖の裏ふゐ〳〵。さも ゐゐぬおゐちゐく。春雨ふと召つゐ〳〵ふゐ殊さゐ麗ゐゐふ。松稚梅稚を伴ひて。 園の花見ゐやとゐゐゐく用意せゐゐ仰ゐるふ。ゐゐけゐゐゐく。俄頃ふ 幕を張らせ。毛氈布まゐ〳〵なゐる間ふ。斑女ハ幼少ゐ二人と携て出させ ゐゐ。盡日拾ひくゐゐゐゐゐゐ入ゐゐゐゐゐゐね。ゐくてその夜も中更ゐゐこゐ。斑女ハ 〳〵ゐゐ起知〳〵燈を掲ゐ宿寝ゐゐ〳〵後方ふ卧ゐる鳥崎とゐび学ゐゐゐ。ゐゐゐ 近く招さゐせ。この艶簡ゐゐゐく。一封を出させゐゐハ鳥崎へその ゐゐとゐゐ。小夜深ゐふ行ゐゐのゐゐ〳〵。まゐゐゐゐ孝と仰ゐるゐゐ不審

なかりし。半讀もとらざるに大に驚たり。又山田どのより。今宵彼処にてかのんとての回書あるに。ゆめてゝたらたるに。只顧胸のみ打さわぐと斑女へなほさらぬ風情なく。その艶簡おおえありやと問ひのふかぞ。今ハ匿さんも許しありじと松の人へがりくふむを定め赤塚の避雨よろ。山田三郎と密會し。有身なるともしらざるぞ。館へまかりし折松井源五が群柏をのそ艶簡以贈なせしより。彼童を潜しくぞ召かく。筆に言の葉なかうよの世しるなと或ハ喜び或ハうらみて涙さしぐみつゝやかり。斑女前つくづくと笑ひて。うれしべきの艶簡をいまだみざる宣へば。問せ給ふて。只今讀侍るぞすゝめあるに。かのゝ進みせんとて。そらくもとけるものゝなるとすらふ。斑女前黙然たり。これハ人の見せるかハかゝしぞ。よし冴えゝつ附。なりゆくの処がく捨へるなり。おのれに群柏が悍りくとう落せし。源五が彼童を相語て

汝ふを罪せん為に。ありもうらハせさるあるべし。汝ハ新参のうるふしあれど縁故ハよくもしらねど。彼山田三郎ハ年来まが身を養育する春雨が一子なりしが松稚梅稚が為にハ。いまだ後楯なくしく。殿にもまた久しく恩恵高くおはしますをしらぬ所為をなさしく。家の法度を犯せし入るものゝなりんや縦汝がこゝへまゐらざる前に契りたりと思ふとも今ハその家に仕なるべしの筆にちかくを速情を運べる罪ハいかなるとも脱れがたし。なりハあらし。その善悪ハともかくもいかにもに定むべきにあらず。殿にハ四辻殿にまゐりあれバ。いまだ退きなハねべきつかうるなを猶いかにまうせども。かくもいかにもかならずよしとや。鳥羽山の崎よりまかるないかなるを虚うし。弱人の風俗なく。既にその身を過つるの世におけれる例にならへ寝所のに迫りて枉死し。身後の恥を曝をもの。親兄弟なるいくその哀を見せ愚なるものゝ譬にもいひ出かれく。終にその恥辱を雪ぐの時なし。況君に仕るものゝ罪を



班女前山田三郎ゥ鳴崎へ
艶筒を初く
彼女子と教諭し夜
落し
こんより前の日
鳴崎が
使して艶筒を
山田三郎へ
松井源五
捐ミ彼二人
と罪せんと
謀れ

まことぞ〳〵こぶる刀ふ伏をおんどれ〳〵めぐさるふもめ〳〵どよ〳〵や汝を
行ちと呂へ光政いと〳〵辨てもめりおんいふさんめ〳〵ぬると宣へ鳥崎へそぐめより
頭とぐふ擡得ど。情める主の言の葉と顧る程鈍〳〵く。只涙のこちふり落て袖
さへ絞めへざりる。斑女前もいとこちろふおがじろん重てるゆとへ宜ど。俄塡ふ
物とろひ出せ〳〵おもちふく。こぶ刀ふ園の花を挿ど歌のいまごろふ稱ざれば。
枝ふ引著ざしふ。今ちるども一首の趣向と引ちる。汝彼処ふかれく。築牆の
かちるる。ふちるる櫻の外面へ水垂ま〳〵枝ふ。これ著く来ま〳〵小夜深ざれば
ちく〳〵怕ま〳〵人を驚〳〵ちと仰て。墨ちる流〳〵ちく〳〵と書つけ。その
短冊を遍与のふも元ちろめりぢ。鳥崎いを呂果〳〵る兄涙いものろん。
胸の中さへうれれく。立足も定うあれど。主命の已ぐさふ。ちろる園ふ出て
池を繞ま。水蔭を潛ちく。彼水の下ふ到ちる〳〵ぐ山田ニ郎へ合圖と違ど。

鄙ちろふ竊居ち。月めちふ〳〵ちる。ホ立の間とれ知〳〵ちどてめくへ
遷ちる。つと待憂ちつちく潛れれば鳥崎ぢて走ちりへいでまぢる。
袖の雨も音漏さどちやこぶる。池の蛙もちぐ鳴く。月さへ更ふ朧ちる。光政ふ
ちちる〳〵その脊と推ちる過ふ〳〵きのふより筆ふちもられば且く措ふ
ぢこのちろれ物おりひさちちと推量ち程もぢ身ふ迫りてちくいめぐるものず。
只〳〵ぢいぢふ限ちちも中えちいちちそやく後ぐ〳〵ちとちる涙とちどめ
ん泣ちる果〳〵ゆ也と。鳴崎ぢう。ゆく瞼とちる拭ひく。つふべきちりゆ中づに
ゆも。ぺふちのちひあれ身とちりねそへ〳〵ふ身が返事ちちへつる玉章と源五
ふや謀ら也〳〵ん。ちちへぢふれもせぬと斑女御前の拾ひりひく。夜も深人も
定ち後ぢる仰ゆりしちく。首ちる尾まぐ。涙の隙ふ物ぢる彼短冊
とちる如せば光政ゆ中〳〵ゆ毎ふ汁りく胸と刺ちぐ〳〵ぢ過ちれる

責て理なれ身をうらむる外なく。ふりくふ見ひとえなるこころは不審れいまの夜
中ふそのの短冊と著よとく。この樹のもとふ匿のめへ。ものを潔く居るもとを食
べよ逢ものかこの物ひ匿と畏こて。彼短冊と押戴き。月影ふかれとんとべ。

山ゐぜの吹しおろ〳〵ぞい散る花も又来れ春ふめぐらうめやハ

と書ひめ。先政ちを〳〵うち吟じく。忽地ふ潸然と落涙色ふ眺りて
忠も義もちれくる愚者を憎しもおぼされど花ふめ匿の譬ことく自害ハ
こゝめのふとも匿柳野上ふ在せ〳〵へりとりふ生こちく妙と呼び出と呼れ
うゞ母の主君ちを。ちゝでさわれば年来の憂ふハ仕ざるのハ今少将の内ふく。
ねゞめのこと人もちる身の幸ハ多くこの君と親との恩恵ふ。ゝ忠臣とゝ
ゞこも乱離の人とゝり果ゞ母ゞ多年の識忠とも徒ゞとゝこそ不忠の
うへの不孝なと。こハ面ゝ〳〵已ゞ隨ふ死るハも死んざる情ぞ絆ゝ

こく。ものふハ勇れ壮夫も。如匿れまゞふ口境ハ鳥崎ハ悲しびく。寔ふハ身
とゝ〳〵こと。過世もの悪縁ふや一館へ給事ふ。ちゝハ後の殃とる。ちて漫ふ
秋びしふ今ことをへハ法ゝゝ。女ゞろふく。ゝゝこもかゝこもこ脱まこ汚ぬ。
罪こハちれど有身く五月ふまゝとおぼんぱものふも人の形づくり。又ふや
肖ん母ふや肖んをもちゝゞ鄙ゝ。くれふ帰ちゝ惜こて今ハ匿
めくこハちる。親の心の烏夜と照こと。如の月も西天へ傾く寺くの。鐘の
音ゆゞハと深くゝ。元政猛ふ紛れ。ひとれ歎しく時をゝ匿。斑女御前のゝ
ゞゝ。ゝゝこゞて在こくんふせく今宵と限ちもハ潔く立別と。刃の錆と
ある日ふハわこくもめん彼処の花ふく短冊とこのへこくとハそゝくく。
見ゝこれゝこくこと生る。枝ゝ撓んこるふこくくこども。一ツの戦布を探當ゝち
驚れて鳥崎と匿招きこれこのこくこの枝ふ。影の黄金とゝ見ゝ匿ゝ斑女

御前の吾儕に私に賜るものにこそ。これとてもふるびとのこゝろを考るに。山
風にちる花も。折らるゝ花も又来る春にあらんずれば。館を脱れ出。偶然の時成
待よとは。花ゆのいはねど存命ふることにせよとらくかけのむし。謎も戝布を
いと重き。恵へ季札が剣に勝まさるごとく思ひやられぬ。且かしこく且感
ぜる声さへものびくなる。鳴崎もまつこのふに。ひとりまりに落る。数行の涙をとゞめ
かねて流るゝ泪を泣のこしん。かくて山田三郎は。彼賊布と短冊とおし戴く
懐にしまひ。彼方を伏おがみ。かくりせば甲夜の間に母にも見えて外なかる。
身の暇乞をもなさんかりしに。何処へゆく時しあれ。別れかねつるも夜も
あけべ例なれ。鴻恩を空せん。誘ふ人どいそがして。下括の紐解もあへど。閂と櫻
い枝に援りけ。これに携りせる。築垣を超んとする。鳴崎は目眩て。足
さへさらに定らねど。危ても又携るをかに。枝も揺て雫と散うる花は雪なる。

雲の棚びかれる心持し。辛じく外面へ出でゝゆらゝらちて息も吻めへぞ。近江
路を投て逃去りぬ。詰このたびのしかる程に。斑女前は。ひとり寝もやらで在
せしに。鳴崎縫ひそらず来ねべ。彼木かしこくもまたが心をおちて。奔つらんとおぼ
しつゝ。目睡もやらぬに。春夜なれバ短くあけたり。少将惟房も四辻殿を
退きたれば。直に仰らるゝやうに。斑女はしのびやかに。山田三郎と鳴崎が身を突え
なかに。惟房うち點頭て。かしくも討つるものかな。彼木ゆりその過を人むいかれ。
まれも面あたりに。ひとしく見ければ。ひとつに助んとそふとも。家の法度を破りがたくて。已
こなたなども首を刎るにも至るべし。されバ光政が一旦の過によりてその母春雨が
年来の忠義を空せんも便なし。彼が色に惑ひて。君を親しく遠離ほどの
弱きぞ致ところぞ。原来その志の信なるをもあれバ。よくもちぬ必逐べから
とぞ宣ひける。春雨はこの言を鴻ざく。感涙雨のごとくおてつ子の往方は

山田こうハ鳥崎と
共ゝ班女前の恩惠
忘れてしらぬ
櫻ふけらる影の
金を得く遂ふ
白川の館を
逃去

つゆばかりも念とせねど。いかで君の爲には死を用し。高き恩惠に答へまつる
べし。と思ひ定めるも又哀れなし。さても松井源五純則へ群柏と相語らひ。山田
三郎が艶簡を。主君出居のかたりに捨置し。彼に罪せんと謀りつ。なほ飽かねど
ありけれバ。彼二人が逢んとて。合圖を定る園の木陰に立かくれて其夜の形容
をもまちけるを。とひつるに。斑女前春雨をもていゝせのふかき殿かへ今宵は四辻
殿にまゐりたまひ。門に退出のみぎりは夜もいたく深ぬべし。弱きものゝ恐も惧しからんが
道の程もおぼつかなし。汝今より御迎にまゐりゆへと仰られバ。源五大に迷惑
して。殿には夜深く院の御所を退きたまふべくもあるに。おもふに今夜のそ
かくは宜ハざると怪しと思ひながら。君命辞するに言葉なくて。まゐりもやらぬど出
ゆきぬ。されど光政も鳩崎もさえて阻める人なくて。輙く脱去るにぞ。これ皆斑女の
恵にて。源五が僻しかるをよく量て。彼を遠離のためなりけんかし。後に源五も

夜ぬけして後主の側して館にかへるとせずて。山田三郎を尋るに。昨夜ハ鳩崎と連
て奔りしと定なし。と人々驚き怨りて。彼此に人を遣し。その往方を探索すに
さらにしるべきものなかりけれバ。いよいよ腹にすゑかねて。さても者奴にハ果報ものの
あり。首刎らるべき罪を犯して。奔出ても追捕らるゝはず也。かくて忠義を
竭さんも無益なり。賞罰正しからぬ家に仕へて求むるゝはずなどゝ罵り
ちらへども。粟津六郎をはじめとてなきちらせど頻りしてわりなれバ。源五はやく疑ひ
惑ひ。此ふたり謀計と群柏が漏して。君にも其たりふゆると思ふに。忽地
影護ありて。彼童とあはせたりけるなめりと深念しつ。ある夜竊に群柏を
縊死し。屍を加茂川へ衝流して。なほ人の疑んを怕ゑ。白川の館にかへりける
がなりけり。其のかたはらに彼童が草履をおく也とて。脱捨るやうにしらへ
おきたりき。さて詰朝群柏が見えざるとて。人々あまく尋めぐるに北面なる杦の

木の下ふ脱捨る草履めるかえ〳〵大ふ驚れこれ群栢い天狗なりのふ
繕ふ〳〵とおゞ。世ふ神ゞとあがめるあさふめ〳〵ど。彼ハ幼れより父母と喪ひ
く。親族もこえくまれりのあるべ。殿ふ。憐ぶりのひつふ。鞍馬愛宮の峯ふ
修ぶ〳〵。いく年修るとも修〳〵どいとも奇〳〵れ牙の果ありとらひめ〳〵と洛中
洛外の良賤ゆ伝〳〵。此白川の天狗屋舗とゞ稱〳〵。衆人ハかゝるものへ少将と
斑女の〳〵。伴のものをもりて在せば。群栢が往方定らるめ。源五が有ふいめ〳〵ぬ
と疑ひおぼしてとゞめ　往ば彼を用ひのゞ。ろづ栗津六郎の〳〵ふ委ね
のひうれば。源五ハまもく面目をしるく。物〳〵憤ぶりのとゞ〳〵。更ふ色ゆ
めゝはゞど。信〳〵ゞふ仕るゝと憎つべた侍人ぞり。

五　亀鞠俳優〳〵賊僧と欺く

ろふ亦曩ふ叡山月林寺ふ登り〳〵。沙弥とゆりる行雅ハ成長ふちるゞひて

心ざまい〳〵正〳〵ゞと。師父の教誡る用のゞして。行ひ放なれば。親も疎こも
憎おりふざるりの色。その多平家の嫡流朝歌行盛の子ふしめれば。そく喪るべた
首ゆゞと。惟通ふ継ぎこれば心と菩提の道ふ委眼を寂滅の教ふゞめ〳〵。おさ
父母の後世一門の冤魂得脱ともるべきふ。出家人の作行とつゆゞろりを
おゞとゞて。酒を嗜〳〵色ふ惑ひ。年十七ゞ秋ふ。辛崎の農家。伊ゞが女児と
誘ひ。往方もちゞゞるふゞ。こ惟通の病死せ〳〵ゞろなれば。彼家より探索る
ゆるゞ。ろふ往ゆせざるふゞ〳〵輙く脱ぎ裸く。彼女子を携ゞ〳〵信濃
路ふ足をゞめるふ。元其の性便佞なれば。彼國の住人仁科二郎平盛遠
とゆりの〳〵庇と稟。遂ふ盛遠が義子とるゞ〳〵。仁科平九郎盛景と名告。次の
年鎌倉ふ赴く。只顧奉公と望〳〵ふ。ゆる人の吹挙ふゞて執権義時朝臣
の舎弟。北條相摸守時房の内肉ふ召〳〵えて。こふ〳〵子ども二人ゞて出生

とちろふ冢子恕太九郎。女児亀鞠七才あり。ころ。盛景親子忽地鎌倉と追放せられ。その故いふと尋ふ。彼平九郎盛景年来の行ひよろづ。若殿原と大磯化粧坂の遊里ふ誘引しべ。これゑふ賊と喪ひ色ふ溺ま〻奉公等閑なるもの駄なり。こゝを仁科平九郎が知るし衆評一決せ〻ばかり。ゆゑあり召仕はんゆゑ。士庶の風俗もゝ乱ゐんとゝ。俄頃ふ追放せ〻ばこゝろ。されど年来貪〻ろ賊少うれべ。駿河なる喜瀬川の郷ふ居ると下て。女児亀鞠ふ歌舞俳優を做ゆゝくをゆゝ世を歩くわとらんとゝろふ。冢子恕太ハ幼少より膽太くして。動もれば友ごらとあゆ〻ゆひとものじ。おのれふ年の勝るゆゑ。傷ゆるゆゑ。又常ふ父母の金銭と盗ゆ〻口腹のゆふ用盡し。後ふハ他ふ借ま〻逃るものゆれがものゆ懈るその父母のゆ〻ふ係りて。これを償ふ少〻のゆふゆゑ。佞奸邪智なる平九郎をゆゝ子の悪行ふ呆果めゆる日懲らんゆゑふ〻〻打擲せ〻ば。恕太ハふ〻〻恨りん。その夜ふぢうなる五両のまりの金と。父平九郎が行稚と。月林寺ふて祝髪せ〻とゝ。行盛の紀念ゆりて惟通ゆり相傳もゆる。備前の家次が自他平等即身成佛の戒刀と盗ふ。いづ地ゝゆく走ゆ〻。ふ〻び帰〻ずこい恕太が年才十二の春なり。父ゝこれふ驚ゆ〻。普〻その往方と索〻ゆ〻。音づれめ〻ざれば。母ハ只顧憂ゆふゆゑ。長き病著ふ貯禄も枯りゆゆゆる。遺果せるゆゑ。死ゆの旅路ふ赴ゆ〻べ。平九郎ハ妻と愛子とゆ〻ふ〻ゆ〻。さすがふ心がゆゆゆゆゆゆ。亀鞠を惹〻。只その成長ゆ〻ふ年月のゆゑ行ゆびねゆゆふ亀鞠ハ立舞ゆゆゆ。熟眉ハ初春の柳葉ふ似ゆ。雨の恨雲の愁と含。顔ハ三月の櫻ふ異なゆゆと風の情月の意と藏ゆゆ。寔ふゆの容止の勝ゆゆゆ鎌倉ハふもゆゆ洛ふも又類

仁科平九郎盛景
喜瀬川を孫居して
女児亀鶴を放棄と
習しむ家子悲太
友達ふ痩つみ
つのりり

めしとしたまふぞ。こゝ五の秋の半より。白柏子といふものふたりて父と養ふ便と
せり。いわゆる建久年中。この喜瀬川ふ亀鶴とゝ白柏子のあり名どそれふハ
なほ遥ふ勝れたり。このころハいと稀なる田樂乃毛ものどもとべく俳優ともし。
鬼女怨霊ふ打扮ふ花の顔忽地ふとあらぬ真偽と候ものなれば
その名都鄙ふうれすこれが為ふ心蕩魂と奪ふ少しく亀鞠ハかく姿
こそ美麗なれ。ゆざまのようなれば父ふも兄ふも芳らざれば只残ある小媚ふ
南ばく。実の情ハ家祖ものしれかなほ曉らぬてその弱ふ係り。産と破り家と
喪ふ。不孝の子弟いと多ふ祖ふ。その親しるものふく憤り。所詮鎌倉ふ
ゆえめりく。亀鞠と追ひうしなひべし。彼親ふなめらそひ阻べ。終間撃ふ
ものこの禍神と禳ふなど。叶ぬ罵りのまべ。平九郎りれ
冷笑ひこふく世とうしぬ。月日ハ外ふ照あるものふ。洛へ上りてこと。

運の程をもうしべれ。今ハ駄の年を狂れべ。洛の人もこれを狂雅なりと。恩
ふるものふめ比と尋思し。俄頃ふ家財と沽却しく。亀鞠と轎ふ乗せ館で
廣言吐ちしつ。遂ふ武蔵川を起程れべ。凡ふとりうる人ものこれを欺さるハ
なりしとぞ。ゆくて亀鞠親子ハその日一里あまりゆきく。薩陀山のてふとる。倉
澤とゝふ処ふ宿うるふ。隣ふて生ふ弱ふ旅僧とおぼしきふ二人まく。假
初ふ路の疲労と問慰ふ。彼僧ハ紙門と細ふ開ふ。面のく半ふ出ふ
ひうりくるふ。ふまゆうるふ近曾武蔵川ふ名しる。白柏子の君ふこそ。愚僧ふ
三嶋の神社のあるふ。行ず寺の法師なるべ。日来彼郷をも彷ひまめをりく。
とゆくこの人とハ知ふ。こて親ふづねふく旅ぶらまふハ物語まべ。いづれの
里場へり多うるものと問ふ。平九郎答て否さるこの人旅ものもあるぞ。洛ハふ故郷
なれべ今度ふひうてよるあくいとふ。両僧ハ遠けて路くしふ。

出家人ふかゝるどん。尾張路まぐいはりろとりふ勢ゝべきふ。形ふ脚ゝからんゝ
影護し。洛いろづ風流ゝれべいろ世ゝるひもめりて。息女の名も狩高く変え
ゝん。今宵ハ江口ふ宿りを求し。圓位法師が風情のりあどうち戦ゝ。
睡ゝくとひうけつ。紙門を舊のごゝふゝ。ゝゝ。ものゝ卧房ふ入ふけれ。
平九郎も亀鞠も。合宿ハ法師ゝふゝろ放し。啓行せしその日ゝれべ。
ゝゝ疲労ゝ熟睡ゝるふ。忽地亀鞠が叫苦一声ふ。平九郎驚覚
岸破と起ゝゝふゝ。燈滅ゝ善悪とゝれバ。大ふ焦燥ゝゝ彼此と
ゝ探ゝ。亀鞠ゝと寝ゝ。ゝ應ゝふ。ゝゝ周章。郝ゝる
紙門ふ探ゝれバ人の出入る痕ゝてゝふゝろ疑ひ。衝と入ゝゝ
裸れば。様ゝの遺戸ゝ明ゝゝゝ。天ハ結陰ゝれど。月も出ねと
おぼゝくて。彼処ゝ引くゝふ。ゝ四隅と尋ゝ二人の僧も卧房ふ

ゝゝどさてハ者奴おハ念秩ゝゝと。睡ゝゝて女児と奪ひ去ゝゝてゝそわど
ゝれいで追ゝゝんとゝれまくと。主人ゝれ燈ゝん。燭と乗ゝ忙ゝ走り来ゝる。
平九郎ゝゝ。如此ゝゝのゝゝと告もめべどゝ力と取ゝ追んとゝるふ。行李ゝ
盗去ゝゝゝて一物も遺ゝめねべまゝゝ憤ふ堪ど。裳と裹ゝ。直ふ庭門ゝり走
ゝふ。ゝゝ脱去ゝゝと足ゝゝ。一帯の草ゝみ踏ゝてゝゝゝれと葉ふ
追蒐ゝ。薩陀山の麓ふ到ゝ。雲月と吐ゝ路もいとゝゝふ。伴の賊僧。
一人ハ亀鞠と小脇ふ抱れ。一人ハ平九郎が行李を脊負ひ。先が似ふ彼山へ走ゝ
登ゝゝ。吐嗟とゝゝめせんども。遥ふ後ゝゝれべ。左右ゝゝも追著得ど亀鞠ゝ
ゝ飽ゝゝ。遅ゝれべゝゝる時ゝも敢ゝゝゝど。ゝれ抱ゝ。警結ふり解ゝ。丈ゝる
黒髪と乱ゝ。ゝゝ小指と嚙切ゝ。その鮮血とりゝ満面とゝゝゝ彩色
ゝゝ。賊ハゝゝどゝて山の半ゝ。地蔵堂のかゝりまぐゝ来ふゝ。ゝの所路

仁科平九郎洛へ
上り人とて薩陀山
の麓舎沢とて
処に敗れ
二人の賊徒ハ
行李と共に
亀鶴と
奪ひ
去る

挾くちく。雄まい青山峨くと聳。雌まへ蒼海渺くちく。水際ふ至て數百丈。さるふさへ目眩くと。彼ふいわくもぜど。ふふ来くてちゞめく足を停め抱る亀鞠を扛おろせば。こいいふさも義ゆうし姿も忽地悪鬼羅刹と変じくくしも列衣べき勢ひあれば。二人の賊僧驚れ怕ぢ脱れ走くんとちる。一人岨と踏外し。撲地と倒るく滾落る。一人扶起さんとくその手と楚と握めゝ力及ばくくりろちふ。底さへちめ海原へ流さまおぞ陥ちる。亀鞠ハちへ程ふ碁縛く莞尓とちち笑く。裳の塵をうち拂ひく。舊の路へ立向んとちるふこゆくと呼ちると。誰ちと見へ人をなしつと怪しとちひあぐ。又走り去んとちるふ。呼びちゞめのぐくあれば。ちすぐふ男くちれ如ふあんちも。行ちるく身の毛いくちく。行も悩る乳色へ。時ふ地藏堂の扉と。裏より左右へちと開れ。跳巾同深ふ被

ちる荒男。禹歩ふ揺ぎ如くく。亀鞠が後より。項髪をちと掴て汝甚膽太し。鷲の二人へ欺くちも。つゞでうまれを謝れ汝ん。さゝば妖の程をゆういとべくと。罵るおしも。平九郎いゆ。この処へ追ひ来りこの形勢を見て。はこ。ふ少くくもちゆうべき。おどろちる枕の枯枝めるを見く。掇取ちゆ〜打くち蒐れば。彼男へ。亀鞠を突放。刀と抜く逆戟ふと。平九郎つと入りて。直ふ刃を打落ば。彼もおぼえるものふく。ん潜りつゝ引組ち。元来巌石尖ある細路の。石滑ちへ溜流ちく。つと滑ちを上と下へと挑こ爭ふ程ふ。終ふ組ちるまと放。平九郎へ雄ちの谷方へ顛ちる。荒男へ雌ちりて海へ滾落く。生死もちくどありふちう。亀鞠へ火がつと危うつちをちく。ふと脊ふ汗と流く。彼此と走り繞ちの。ちんちべるげく。それど平九郎へちんひあく。ふくくも陥ざれば。藤蔓ふちつちるどつ。辛ちく舊の処へ

亀鞠小指の血とりつく顔を染
鬼女のお扮さく賊傍らを驚し
数千丈の海原へ滾一落も断も
一人の荒男地蔵堂のうちよ
ありてこの景迹を窺ふ
平九郎も亦
追蒐来り

平九郎ハ荒男と
引組ンが終ル
左右へころがり
輾隨
ムシ〳〵ハ
奉支ル

跋登りしが。こゝふ来れるこれハ。彼荒男ハ敵せんとこゝの〳〵ふ〳〵。亀鞠が異
なる景迹と認ゞ。このこゝにちゞめ〳〵その模様をよく〳〵大ハ驚き。全く妖怪も
とゝ〳〵ゝべ。矢庭ハ石を拾ひて。打うけんとする。亀鞠聯鞅掌〳〵やよ
父ハ。〳〵ハをいふものゝと叫ぶ声音の疑ゞ〳〵もめ〳〵めゝぶ女児ありれば
服と定く〳〵熟視ふ。例の俳優〳〵。鬼女ハ打拾ふ。れば〳〵〳〵と打笑て
まづその故を問ふ。亀鞠ハ二人の賊僧を紛んぬ。指を噛切りて顔を染ふる
る。彼賊ども。これハ膽を冷〳〵。脱ぎ去〳〵んとして悞く海原へ滾落〳〵る又
盗まとる行李刀ゞ。賊が脊負ゞ陷れば。ふり復ハ由なれる。見彼ゞて
わゞ〳〵れば平九郎ふ〳〵秘ひ〳〵。行李の裏ハ路銀を入おきるハ今見
とゝしあひゝ。洛へよゞ手ゞを見。それば〳〵〳〵ふ去淀川へ立うゝべ。
世の胡慮とあうあん朽ゞ。やせまゞ〳〵。親子さ〳〵對〳〵

談合をふ。亀鞠地蔵堂と指〳〵。彼男が堂の内より出ふる成ものハ
行〳〵ふ〳〵引剥ふる。山客の魁首ゞ〳〵。ゝれば彼ハ些の物
あるものハ。ゝ見ふ。ゝ〳〵人もゝ〳〵れば。ゞ〳〵堂の内ハ入りそゝるふ。只一つの笈
さ〳〵覗くふ。ゝ〳〵人もゝ〳〵れば。ゞ〳〵堂の内ハ入りそゝるふ。只一つの笈
ハ木像の阿弥陀を安置〳〵ゝと。灑の香の〳〵〳〵。裡ハ如ゝ。瓢一つの外
ハ一緒の銭を見。こゝ用ゝ。笈ハ開ふ。駿の路銀を掴〳〵行ゝ。と打腹
さ〳〵〳〵其処ハ走り出〳〵。打落〳〵る荒男が力を拾ひ〳〵。月影ハこれ成見
見ゝば鎬ハ八つの文字ゝ〳〵て。自他平等即身成佛と鎬著ゝれば。忽地駭然
とゝ〳〵驚ゝ。この短刀ハ〳〵ゝ稚〳〵附ト部惟通〳〵授〳〵〳〵。年以前
熱太が家出ゝ〳〵る夜ハ携ゆゝ〳〵るものハこゝ。ゝれば彼荒男ハ〳〵ふ熱太ハて
ゝ〳〵〳〵と。年と孫〳〵稚魚〳〵ゝ。ゝ〳〵ゝ生夜中ゝふ〳〵〳〵遂ゝれば。

そんうとも云ひうけど父がまづ〳〵千尋の底へ輾おとせ〳〵とそ淺ましくれ。
こゝ行とせんとて。愁傷大ゝとあるべざれば。亀鞠も忙然と遥き海を直下
ちらく見惣太が必死を哀む。悪獣もあれその類とおりの恩愛の一條の
善悪邪正の差別あく漫ふ落涙ちらりくる。且く〳〵平九郎ハ彼笈
を扛おろ〳〵これもまぶの形見あれば。これハ今よりこの笈を用て回國
の行者ハ打扮縦路をぶく人ハ一銭を乞ても。洛まぐハ至るべし。四月ハ又
笠をふくしく。田舎女児の仮初ハ物詣をるぶくハ足せく。父が先方後方
ハこちらづ目をぬかりちして。進まど後目ど来りへ已阱りく虎と
猟ものいそのの皮を剥んが為。個〳〵亀と渙りのいそのの甲を取〳〵んが為し
出身あまりハ妍く。且裝ひも花麗なれば。却くかる禍あり。ちらしのへと
説示せば。亀鞠もいとことりふそと諾あひねさく平九郎ハ伴の戒刀

を亀鞠ハかしめ〳〵せ。まぶ身ハ笈を脊ハ〳〵。行者の模様ハ〳〵
うひ。ふ〳〵び倉澤の旅宿へふ〳〵ど。親子山路を西へ下りて浦田川を
渉ろ〳〵。亀鞠ハ河水を汰ぶ〳〵洗〳〵ろ顔の鮮血を洗ひ出し。舊の
美女とあらしべ。この川の西ある森を。女體の森と名づけしとぞ。又惣太
が滅び墮さる処。親ちゝぶ子ちゝどと呼く。今りく薩陀山中第一
の難所ことそこいこる後人口碑ハ伝ぶく。かく名とさへ設るあるぶ。

墨田川梅柳新書卷之二畢